

## 255 Hypertrophic pulmonary

osteopathyの骨シンチグラム (肺癌141  
症例の検討)

自治医科大学放射線医学教室

中間昌博、宗近宏次、菅原 正

Hypertrophic pulmonary osteoarthropathy

(HPO)は胸郭内悪性腫瘍の約5—10%におこり、なかでも肺癌で最もよくみられる。HPOの症状は四肢の骨、関節痛、浮腫等を主とし、リウマチ様関節炎に類似する。しかもHPOの症状が呼吸器症状に先行し、肺癌の診断をおくらせることもある。一方肺癌の診断がすでに下されている症例で骨、関節痛のある場合には骨転移と、HPOの鑑別が必要となる。われわれは自治医大呼吸器内科にて診断された肺癌141症例の $^{99m}\text{Tc}$ -MDP骨シンチグラムをretrospectiveに検討し、6例のHPOの症例を得た。これらの症例について臨床症状、骨シンチグラム所見、原発巣治療と骨シンチグラム及びX線所見を対比、検討した。

結果：1. 6例中4例が膝関節痛を訴え、うち2例では初発症状であった。

2. HPOの骨シンチグラム所見は大腿骨及び胫骨で最もよく認められ、対称的な線状のとりこみが骨皮質にそって見られ、限局した中心性のとりこみを示す骨転移とは容易に区別される。

3. 骨シンチグラムで何らかの異常がうたがわれてX線写真をとった症例以外ではHPO診断のうらづけにとほしい。従って骨シンチグラムでHPOをうたがうことが重要である。

4. 骨シンチグラムの所見はほぼ臨床症状と同様の治療後経過を示し、骨シンチグラムによる経過、観察が有用である。

## 256 骨シンチグラムによる骨移植部の経過観察

東京慈恵会医科大学 整形外科

沢井博司、宮島昭博、伊丹康人

県立厚木病院 整形

大森薫雄

骨移植の成否は、移植骨の種類、大きさ、移植部位、年齢、力学的条件など、いろいろな因子により支配されるが、特に移植母床の状態は勿論、移植骨の種類と移植方法に大きく左右される。また移植骨の生物学的活性については、今日なお議論が多く、RIはこの問題を追求にはかっこうの手段であり、生理的、動的な過程を連続的に観察できる利点がある。そこで我々は、骨移植の成否、骨移植後のremodellingの時期などについて、 $^{99m}\text{Tc}$ -磷酸化合物を用いた骨シンチグラフィによって観察した。

〔方法〕昭和47年以来、慈恵医大整形外科における骨移植例は、総計341例(男150例、女191例)でその内訳は、骨腫瘍92例、変形性股関節症92例、仮関節37例、脱臼、骨折35例、先天股脱33例、骨髓炎23例、その他29例である。

骨シンチグラフィは $^{99m}\text{Tc}$ 磷酸化合物10~15 $\mu\text{Ci}$ を用い、移植後3ヶ月、6ヶ月、1、2、3年毎に経時的におこなった。また、同時にX線撮影をおこない比較した。

〔結果〕移植後、局所に強い集積をみたものが6ヶ月を過ぎると減少し、術後3~6ヶ月には正常の集積比まで回復した。

(2)骨移植後12ヶ月を過ぎてRIの集積のつよいものは、骨髓炎の再燃、骨腫瘍の再発、骨移植の不成功で充分注意を要するものと思われた。

(3)海綿骨移植群では、皮質骨移植群に較べ6~12ヶ月早く、正常の集積比にもどった。

(4)手術時年齢からみると、10才未満では、12~18ヶ月で集積比が正常となり、それ以上の年齢では、はっきりとした差はみられなかった。